

神代卷二

東京 太田秀敬編次

神代卷二

大朝和氣尊ト號ス又譽田<sup>ホ</sup>天皇トモ胎中天皇<sup>ハ</sup>

號ス仲哀天皇ノ第四子ナリ母ハ氣長<sup>オキナガ</sup>足<sup>タリ</sup>姫尊

ト號ス<sup>即神功皇后ナリ</sup>仲哀天皇ノ九年十二月十四

日ニ降誕シ神功皇后ノ攝政三年正月三日立テ

太子トナル年<sup>ミトシ</sup>四庚寅ノ年正月一日即位時ニ年

七十一 天皇生レテ臂上ノ穴<sup>ウツ</sup>隆起スル<sup>ト</sup>鞞ノ

形ノ如シ是レ蓋シ<sup>ハ</sup>天皇胎中ニ在ス時母皇后

神代卷二

ノ戎装シ鞞ヲ負ヲ以テ感スルナリ時俗鞞ヲ謂  
 テ譽田トス故ニ以テ號トス幼ニシテ聰達玄鑒  
 太子タル一六十七年ニシテ即位ナリ○初メ皇  
 后 天皇ヲ奉シ百僚ヲ帥キ豐浦宮ニ至リ 仲  
 哀天皇ノ喪ヲ發シ梓宮ヲ奉シ京ニ還ラントス  
 ルノ時 天皇ノ庶兄麁阪忍熊ノ二皇子相謀テ  
 兵ヲ舉ケ王師ヲ播磨ニ邀ヘ撃ントス會菟餓野  
 ニ獵シ麁阪赤猪ノ爲メニ咋レテ死ス忍熊退テ  
 住吉ニ屯ス皇后武内宿禰ヲシテ 天皇ヲ懷キ  
 紀伊國日高ニ趨キ小竹宮ニ入ラシメ皇后自ラ

舟師ヲ督シテ直チニ難波ニ向フ時ニ天晦暝夜  
 ノ如キ一連日武内宿禰及ヒ武振熊ニ命シテ忍  
 熊ヲ撃タシム忍熊敗走シ淡海ノ瀬多ノ渡口ニ  
 至リ水ニ投シテ死ス群臣皇后ヲ尊テ皇太后ト  
 號ス朝ニ臨ミ政ヲ攝シ 天皇ヲ立テ皇太子ト  
 ス磐余ニ都ス稚櫻宮ト號ス○皇后攝政ノ四十  
 七年百濟新羅入貢ス 天皇大ニ喜テ曰ク先帝  
 欲スル所ノ國人皆今來服ス痛哉見ルニ及ハズ  
 ト群臣爲ニ流涕ス○六十九年四月十七日皇太  
 后崩ス壽一百同年十月十五日大和國狹城盾列

池上陵ニ葬ル○元年都ヲ輕島ニ徙シトヨアケル豐明宮ト  
 號ス○三年東蝦夷入貢ス即チ命シテ厩坂道ヲ  
 作ラシム○七年高麗任那新羅來聘ス乃チ武内  
 宿禰ヲシテ諸ノ韓人ヲ領シ役ニ充テ池ヲ作ラ  
 シム名ケテ韓人池ト曰フ大和國城下郡唐古村  
 在リ今柳田ノ池ト  
 號○伊豆國ニ令シテ船ヲ作ラシム長十丈之ヲ  
 海ニ試ルニ輕疾馳ルガ如シ名ヲ枯野ト云フ  
 後船朽壞ス之ヲ毀テ薪トナシ以テ鹽ヲ煮ル  
 其中焚テ燼サルモノアリ 天皇之ヲ異トシ  
 其焦餘ヲ得テ命シテ琴ヲツクラシムルニ果

シテ良材ナリト云フ

○九年武内宿禰ヲシテ筑紫ヲ巡察セシム其弟  
 甘美内宿禰 天皇ニ譖シテ曰ク臣兄武内筑紫  
 ニ據リ三韓ヲ招キ以テ不軌ヲ圖ラントス 天  
 皇之ヲ信シ使ヲ遣リ武内ヲ殺サシメントス壹  
 岐直真根子ナル者アリ貌絶々武内ニ類ス其忠  
 ニシテ誣ヒラル、ヲ惜ミ武内ニ代リテ自殺シ  
 以テ武内ヲ救フ武内竊カニ逃レ歸リ闕ニ詣リ  
 冤ヲ訴フ 天皇因テ神祇ヲ磯城川上ニ祭リ二  
 人ヲシテ湯ヲ探リテ以テ詛盟セシム甘美内ハ

手爛ル武内ハ傷フル、ナシ是ニ於テ甘美内  
罪ニ服ス武内佩刀ヲ執テ之ヲ歐テ地ニ踏シ隨  
テ之ヲ殺サントス 天皇詔シテ之ヲ釋シ以テ  
拏トス武内執政タルノ故ノ如シ○百濟功滿王  
ノ子其國人ヲ率キテ歸化ス諸郡ニ分置シ蠶ヲ  
養ヒ絹ヲ織リ之ヲ貢セシム秦氏ト稱ス○十五  
年百濟王阿華阿直岐ヲシテ良馬二匹ヲ貢セシ  
ム阿直岐經典ヲ通覽スルニ因リ皇子稚郎子之  
ヲ師トス 天皇阿直岐ニ問テ曰ク汝カ國ノ博  
士汝ニ賢サル者アリヤ對テ曰ク王仁ナル者有

リ一國ノ秀ナリ 天皇乃チ荒田別ヲ遣シ王仁  
ヲ徵ス百濟王乃チ王仁ヲシテ來朝セシム論語  
十卷千字文一卷ヲ獻ス是歲百濟王阿華薨シタ  
ルヲ以テ阿直岐ヲシテ國ニ還リ位ヲ嗣シム○  
十九年吉野ニ幸ス國樸村ノ人醴酒ヲ獻シ風俗  
歌ヲ奏ス○二十五年漢主劉宏ノ裔阿知使主及  
ヒ其子都知使主十七縣ノ人口ヲ率キテ來歸ス  
則之ヲ以テ公民トス諸國ノ漢氏ハ其後ナリ阿  
知使主ヲ吳ニ遣シ縫工女ヲ求ムルニ吳王女工  
四人ヲ來タス○二十八年高麗入貢シ表辭甚嫚

ス皇子稚郎子之ヲ讀テ大ニ怒リ使者ヲ召ヒ其  
 無禮ヲ讓メ面アタリ其表ヲ壞ル稚郎子幼ニシ  
 テ讀書ヲ好ミ阿直岐王仁ヲ師トシ博ク典籍ニ  
 通ス○三十九年百濟王其妹新齊都媛ヲシテ入  
 仕セシム○四十年稚郎子ヲ立テ皇太子トシ太  
 子ノ兄大鷦鷯皇子ヲシテ之ヲ輔ケシム四十一  
 年二月十五日 天皇崩ス壽一百十一河内國惠  
 我藻伏山岡陵ニ葬ル皇太子立ツ是ヲ 仁徳天  
 皇トス

元明天皇和銅五年ニ至リ 應神天皇ノ祠ヲ

豐前國宇佐郡ニ建テ八幡大神宮ト號ス 清  
 和天皇ノ朝ニ至リ神廟ヲ山城國男山ニ造リ  
 石清水宮ト號ス

仁徳天皇

大鷦鷯天皇ト號ス 應神天皇ノ第四子ナリ母  
 ハ仲姫 應神天皇ノ二十一年庚戌降誕シ癸酉  
 年正月三日即位時ニ年二十四○天皇ノ降誕ス  
 ル時木菟産殿ニ入ル時ニ武内大臣モ亦同日ニ  
 子ヲ産ミシニ鷦鷯産舎ニ入ル 應神天皇以テ  
 瑞トシ互ニ相易エテ子ニ名ツケ以テ後葉ノ契

トス○皇太子稚郎子道テ菟道ニ也キ位ヲ天  
 皇ニ譲リテ曰ク大王仁孝遠ク聞フ宜シク天下  
 ノ君タルベシ且ツ我ハ弟ニシテ大皇ハ兄ナリ  
 天皇曰ク先帝既ニ弟ヲ立テ太子トス我レ何ソ  
 先帝ノ命ニ違ンヤト固辭シテ位ヲ嗣ガス互ニ  
 相譲リ位ヲ空フスル一三年ニ垂ントス貢獻ス  
 ル者歸スル所ヲ知ラズ海人鮮魚ヲ菟道ニ獻ス  
 ルニ皇太子之ヲ返シテ難波ニ獻セシム 天皇  
 モ亦返シテ菟道ニ獻セシム往復ノ間魚遂ニ鱒  
 スト云フ 天皇心ヲ執ル一益確シ皇太子其奪

フベカラザルヲ知リテ遂ニ自殺ス 天皇馳セ  
 テ菟道ニ至リ慟哭ス時ニ太子薨シテ既ニ三日  
 ヲ經ルニ忽チ蘊生シ相語リテ瞑スト云フ 天  
 皇猶位ニ即カズ王仁梅花ノ歌ヲ作り諷シテ以  
 テ勸ムルニ因リ乃チ即位ス難波ニ都シ高津宮  
 ト號ス節儉ヲ務メ民ヲ使フニ時ヲ以テス○十  
 年宮城ヲ修ス初 天皇臺ニ登リテ遠望シ人烟  
 少ナルヲ以テ百姓ノ窮乏スルヲ知リ詔シテ課  
 役ヲ除キ宮城敗頽スレテ營作ヲナサス其後復  
 タ臺ニ登リテ遠望シ人烟盛ンニ起ルヲ見テ大

ニ喜ビ百姓ノ富メルヲ知リ因テ初メテ宮城ヲ  
 修ス○十二年高麗鐵盾鐵的ヲ貢ス戸田宿禰射  
 テ之ヲ徹ス高麗人驚異シ起テ拜ス 天皇嘉賞  
 シテ姓名ヲ的戸田宿禰ト賜フ○五十五年蝦夷  
 反ス田道ヲ遣シ之ヲ討タシムルニ田道軍敗レ  
 テ死ス土人之ヲ收メ塵ム後蝦夷人其塚ヲ發キ  
 シニ大蛇有リテ塚ヨリ出テ虜ヲ咋テ殆ント盡  
 ス○六十二年初テ冰室ヲ置ク○六十五年難波  
 根子武振熊ヲシテ飛驒國ノ賊宿禰ヲ討タシメ  
 之ヲ斬ル宿禰人ト爲リ前後ニ二面ヲ備ヘ四手

四足有テ脅力人ニ絶キ左右ニ劍ヲ佩ヒ四手弓  
 ヲ執ル○七十八年大臣紀武内宿禰薨ス宿禰ハ  
 孝元天皇四世ノ孫武雄心命ノ子ナリ 景行成  
 勢仲哀應神仁德ノ五朝ニ歷事シ官ニ在ル一二  
 百四十四年壽三百余ト曰フ○此時ニ縣主ナル  
 者有リ吉備國ノ人ニシテ勇悍多力ナリ當時吉  
 備ノ中國川島河ニ巨蚪有リ行旅害セラレ死者  
 道ニ交ル縣主之ヲ患ヒ水ニ入り劍ヲ拔テ蚪ヲ  
 斬リ悉ク其種類ヲ斷ツ河水爲ニ赤シ時人其勇  
 ニ服シ其淵ヲ號シテ縣守淵ト云フ○八十七年

正月十六日 天皇崩ス壽百十或云百廿二同十  
月和泉國百舌鳥野耳原中陵ニ葬ル皇太子立ツ  
是ヲ 履仲天皇トス

仁徳天皇性慈仁嘗テ皇后ト凡ニ暑ヲ高臺ニ  
避ケ菟餓野ノ鹿鳴ヲ聞テ之ヲ愛ス一夕鹿鳴  
カズ其明日猪名縣佐伯部鹿ヲ獻ス 天皇問  
テ曰ク何處ニカ之ヲ獲タル曰ク之ヲ菟餓野  
ニ獲ル 天皇皇后ニ謂テ曰ク鹿ヲ獲ルノ日  
ト獲ル所ノ地トヲ計ルニ蓋シ朕カ愛スル所  
ノ者ナリ獲ルモノ心ナシト雖凡朕釋然ナラ

ズト乃チ命シテ佐伯部ヲ安藝ニ移ス

履仲天皇

去來總別天皇ト號ス 仁徳天皇ノ長子ナリ母

ハ磐之媛命ト號ス 仁徳天皇ノ十七年己丑ニ

降誕三十一一年正月十五日立テ太子トナル年十

五庚子ノ年二月一日即位時ニ年七十二〇天皇

諒闇ニ在スノ長皇弟住吉仲坂シテ宮ヲ燒クニ

因リ乃チ河内ニ幸シ皇弟瑞齒別ヲシテ之ヲ討

タシム〇元年平群木菟蘇我滿智物部伊呂佛圓

大使主四人ヲ以テ大臣トス〇三年磐余舊都ニ



遷ル一日 天皇舟ヲ市磯池ニ泛ヘテ宴スルニ  
 櫻花飄テ御蓋ニ落ツ時方ニ盛冬ナリ 天皇之  
 ヲ異ミ侍臣ヲシテ之ヲ覓シム侍臣被上山ニ於  
 テ花枝ヲ得テ獻ス 天皇大ニ喜ヒ乃チ以テ宮  
 ニ名ツケ稚櫻宮ト號ス○四年始テ史官ヲ置キ  
 民ノ言事ヲ記シ四方ノ志ヲ達ス○六年三月十  
 五日 天皇崩ス壽七十七同年十月四日百舌鳥  
 野耳原南陵ニ葬ル太子立ツ是ヲ 反正天皇ト  
 ス

反正天皇

螭瑞齒別尊ト號ス 仁德天皇ノ第三子ナリ母  
 ハ磐之媛ト號ス 仁德天皇四十年壬子ニ降誕  
 履仲天皇二年正月四日立テ太子トナル年五十  
 丙午ノ年正月二日即位時ニ年五十五○天皇皇  
 弟タルノ時住吉仲ヲ討スルノ功ヲ以テ 履仲  
 天皇立テ嗣トナス 天皇ノ淡路宮ニ生ルハヤ  
 瑞井ヲ汲テ湯トナシテ洗フ多遲花飄テ井中ニ  
 墜ツ因テ多遲比瑞齒別ト名ク○元年都ヲ河内  
 ニ徙シ柴籬宮ト號ス○六年正月廿三日 天皇  
 崩ス壽六十 允恭天皇ノ五年十一月和泉國百

舌鳥耳原陵ニ葬ル皇弟立ツ是ヲ 允恭天皇ト  
ス

允恭天皇

雄朝津間稚子宿禰天皇ト號ス 仁徳天皇ノ第  
四子ナリ母ハ磐之媛命ト號ス 仁徳天皇ノ六  
十二年甲戌ニ降誕 及正天皇ノ六年十二月即  
位 翌ニ年三十九〇及正天皇崩シテ嗣ナシ群臣  
議シテ 天皇ヲ迎ヘテ立テントス 天皇遜謙  
シテ許サズ群臣重ヲ奉シ固ク請テ止マサルヲ  
以テ遂ニ即位ス〇二年忍阪大中姫ヲ立テ皇后

トス后ノ微ナル時母ニ隨テ家ニ在リ苑中ニ遊  
ヒシニ鬪雞國造馬ニ乘リテ籬ヲ窺ヒ后ヲ呼ヒ  
蘭一莖ヲ乞テ曰ク山ヲ行クニ蟻ヲ拂フト其辭  
不遜ナリ是ニ至リテ叩頭シテ謝シテ曰ク臣カ  
罪實ニ萬死ニ當ル然レモ其時ハ貴者ナルヲ  
知ラズト因テ其姓ヲ貶シテ櫛置ト云フ〇天皇  
嘗テ淡路ニ幸シ遂ニ留リテ獵シ終日一禽ヲ獲  
ズ之ヲトスレバ則云フ海神ノ所為ナリ且ツ告  
ケテ曰ク赤石ノ海中ニ真珠アリ取テ以テ我ニ  
獻セバ大ニ獲アラシメント是ニ於テ烏蟻戸ニ

命シテ之ヲ捕ラシム皆獲ルヲアタハズ阿波長  
 邑男狹磯ナル者還リ報シテ曰ク洋中深險ノ處  
 ニ大鰻有リテ光耀入ヲ射ルガ故珠アルヲ必セ  
 リ然レモ漫ニ近ツタヲ得ス我組ヲ腰ニ懸ケ  
 海中ニ沈入シ良久フシテ珠ヲ得ハ其組ヲ撼カ  
 サン船上ノ人之ヲ挈出セヨ衆其言ノ如クスル  
 ニ鰻ヲ抱キテ出ツルト雖モ氣息既ニ絶ス乃チ  
 鰻ヲ剖クニ果シテ真珠ヲ得タリ大サ桃子ノ如  
 シ乃チ用テ島神ヲ祭リテ獵セシニ禽ヲ獲ル  
 山ノ如シ因テ鳥番戸ノ死ヲ愍ミ勅シテ厚ク

葬ラシム○天皇皇后ノ妹衣通姫ヲ寵シ宮ヲ河  
 内國茅渟ニ造リテ之ニ處ク衣通姫容色世ニ絶  
 シ光豔衣ニ徹ルカ故ニ時人號シテ衣通姫ト曰  
 フ○四十二年正月十四日 天皇崩ス壽八十同  
 十月十日河内國惠我長野北陵ニ葬ル皇子立ッ  
 是ヲ 安康天皇トス

安康天皇

穴穗<sup>アノホ</sup>天皇ト號ス 允恭天皇ノ第二子ナリ母ハ  
 忍坂<sup>ニシサカ</sup>大中<sup>オホナカ</sup>姫ト號ス 履仲天皇ノ二年辛丑ニ降  
 誕 允恭天皇ノ四十二年十二月十四日即位時

二年五十三〇初メ 允恭天皇皇子木梨輕ヲ立  
 テ太子トセシニ淫虐甚シクシテ群臣服セズ太  
 子變ヲ懼レ兵ヲ率テ 天皇ヲ襲ハントス事ナ  
 ラズシテ自殺ス〇元年都ヲ石上ニ徙シ穴穗宮  
 ト號ス〇三年八月九日 天皇山宮ニ幸シ暴ニ  
 崩ス初メ 天皇皇弟大泊瀨皇子ノ為メニ大草  
 香皇子ノ妹幡梭ノ皇女ヲ聘セントシ根使主ヲ  
 シテ其意ヲ致サシム大草香大ニ喜ヒ因テ其寶  
 トスル所ノ珠鬘ヲ獻シテ信驗トス根使主其珠  
 鬘ヲ愛シ私ニ匿シテ進メス詐リ奏シテ曰ク大

草香命ヲ奉セズト 天皇怒リテ兵ヲ遣リ其第  
 ヲ圍ミ攻メテ之ヲ殺シ幡梭ヲ以テ皇弟ノ妃ト  
 ナシ 天皇モ亦大草香ノ妻中蒂姫ヲ納レテ妃  
 トシ遂ニ皇后トス大草香ノ子ヲ眉輪王ト曰フ  
 年七歳即チ皇后中蒂姫ノ生ム所ナリ母ニ從テ  
 宮中ニ養ハル時ニ 天皇山宮ニ幸シ樓ニ倚テ  
 眺矚シ皇后ニ謂テ曰ク朕汝ヲ親愛ストイヘ  
 竊カニ眉輪ヲ畏ルト眉輪時ニ樓下ニ戲レテ悉  
 ク此言ヲ聞キ遂ニ樓ニ登リテ 天皇ノ寐ヲ伺  
 ヒテ刺シテ之ヲ弑ス壽五十六皇弟大泊瀨皇子

變ヲ聞キ兵ヲ率テ來レリ眉輪遣ケテ大臣カウラキ葛城  
 圓家ニ匿ル皇弟ニ謂テ曰ク臣及スルニ非ス唯  
 父ノ讎ヲ復スルノミト皇弟其第ヲ圍ミ火ヲ縱  
 チテ之ヲ焚ク眉輪及ヒ圓皆燔死ス又市邊押磐  
 皇子及ヒ御馬皇子ヲ殺シテ即位ス是ヲ 雄畧  
 天皇トス

雄畧天皇

大泊瀨オホハセ幼武コタケ天皇ト號ス 允恭天皇ノ第五子ナ  
 リ母ハ忍阪大中姫命ト號ス 允恭天皇ノ七年  
 ニ降誕 安康天皇ノ三年十一月十三日眉輪王

ヲ討テ即位ス時ニ年三十九〇元年幡梭皇女ヲ  
 立テ皇后トス〇天皇葛城山ニ獵スル時皇后從  
 フ野豬アリテ突テ至ル 天皇舍人ニ命シ射テ  
 之ヲ刺シメントスルニ舍人怖レテ之ヲ避ク猪  
 直チニ突テ將ニ 天皇ニ觸レントス 天皇踏  
 デ之ヲ殺シ獵罷テ舍人ヲ斬ントス皇后諫テ曰  
 ク天下陛下ヲ以テ畋ニ荒シ獸ヲ以テノ故ニ人  
 ラ殺スト謂ン 天皇喜テ乃舍人ヲ赦ス〇五年  
 吉備田狹ヲ以テ任那國司トス田狹任那ニ據リ  
 テ及ス初メ田狹入テ禁内ニ直シ盛シニ其妻ノ

美ヲ稱ス 天皇潜ニ聞テ心之ヲ悦ヒ乃チ田狹  
ヲ拜シテ任那國司トシ其妻稚媛ヲ奪テ妃トス  
田狹聞テ大ニ怨ミ遂ニ任那ニ據テ反ス○十三  
年播磨ノ妖賊文石小丸多力ニシテ兇暴大ニ民  
ノ患ヲナス 天皇小野大樹ニ命シテ之ヲ討タ  
シメ其家ヲ圍テ之ヲ燒クニ一白狗ノ大サ馬ノ  
如クナルアリ火中ヨリ出テ奮迅シ大樹ニ向フ  
大樹刀ヲ拔テ之ヲ斬ル即チ小丸ナリ小丸毎ニ  
假面ヲ蒙リ或ハ猛獸ノ皮ヲ被ムリ妖術ヲナシ  
行旅ヲ劫掠セシカ是ニ至テ誅セラル○十四年

吳人來聘女工漢織吳織ヲ獻ス 天皇乃根使主  
ヲシテ之ヲ饗シ更ニ密カニ舍人ヲシテ之ヲ視  
セシム舍人還リ奏シテ曰ク使主着ル所ノ珠鬘  
甚タ美ナリ 天皇之ヲ觀ント欲シ根使主ヲシ  
テ入謁セシム時ニ皇后使主ノ珠鬘ヲ見テ悲泣  
ス 天皇怪テ之ヲ問フ皇后曰ク使臣着ル所ノ  
珠鬘ハ 先帝陛下ノ爲ニ妾ヲ聘スル時妾カ兄  
大草香ノ獻スル所ノ物ナリ今之ヲ視テ覺エズ  
悲泣スト 天皇聞テ大ニ怒リテ詰問ス使主首  
服ス 天皇乃之ヲ誅セントス使主逃テ日根野

ニ至リ壘ヲ築テ拒キ守ル官軍遂ニ撃テ之ヲ誅  
 ス○十八年伊勢國ニ朝日郎ナル者アリ性勇壯  
 善射其能ヲ恃ミ暴ヲ為ス 天皇菟代宿禰目連  
 ラシテ之ヲ討タシム目連大刀ヲ執リ物部大斧  
 楯ヲ持シテ進ム郎遙カニ之ヲ射テ楯及ヒ甲ニ  
 重ヲ徹シ身ニ入ル一寸許然レ目連遂ニ郎ヲ  
 擒ニシテ之ヲ斬ル○二十二年豐受太神ノ神廟  
 ヲ丹波國余社郡真井原ヨリ伊勢國山田ニ遷シ  
 號シテ外宮ト曰フ是開闢元始ノ神國常立尊ナ  
 リ○丹波餘社郡ニ浦島子ナル者アリ一日小舟

ニ乗テ釣リシ大龜ヲ得シニ其龜忽チ化シテ美  
 女トナル浦島子悦テ以テ婦トナシ遂ニ俱ニ海  
 ニ入り蓬萊ニ到リ仙界ノ娛樂ヲ極メ久フシテ  
 歸ラントヲ思フ女其情ヲ知リテ別ヲ告ケ贈ル  
 ニ玉匣ヲ以テシテ曰ク若シ再ヒ相見ント欲セ  
 ハ慎テ啓キ視ルトナカレト浦島子乃チ舟ニ上  
 リシカ俄頃ニシテ浦口ニ至リ其舊里ヲ訪フニ  
 邑閭變易シテ並ニ相識ナシ因テ一老嫗ヲ見テ  
 之ニ問フ老嫗答テ曰ク傳ヘ聞ク往昔此地ニ浦  
 島子ナル者アリ一日船ニ乗テ去リシガ終ニ歸

リ來ヲズト浦島子惘然トシテ自失シ乃チ匣ヲ  
開キテ之ヲ視ルニ紫氣アリテ匣中ヨリ起リ其  
身忽チ變シテ老翁トナル後終ル所ヲ知ラズト  
云フ○二十三年八月七日 天皇崩ス壽六十二  
或云百二十四同十月九日河内國丹比高鷲原陵  
ニ葬ル太子立ツ是ヲ 清寧天皇トス○雄略天  
皇性剛強ニシテ殺戮ヲ好ミ婦女宮中ニ入ル者  
泣訴シテ免レンコトヲ求ムルニ至ル又田獵ヲ好  
ミ遊畋度ナシ然レモ天資英明末年意ヲ政理ニ  
留メ皇后ヲシテ躬ヲ桑ヲ採ラシメ以テ蠶事ヲ

勸ム葬ルニ及テ一草人有リ陵邊ニ號泣スルコト  
七日夜終ニ食セスシテ死ス有司禮ヲ以テ之ヲ  
葬ルト云フ

清寧天皇

白髮廣國押稚日本根子天皇ト號ス 雄略天皇  
ノ第三子ナリ母ハ韓媛ト號ス 允恭天皇ノ三  
十三年甲申ニ降誕シ 雄略天皇ノ二十二年正月  
一日立テ太子トナル年三十五庚申年正月十五  
日即位時ニ年三十七 天皇生レナガラニシテ  
テ白髮ナリ故ニ白髮皇子ト稱ス○元年壇場ヲ



磐余甕粟ニ設ケテ即位ス大伴室屋ハ大連平郡  
 真鳥ハ大臣タルヲ故ノ如シ〇二年十一月大嘗  
 ス〇三年億計王ヲ立テ皇太子トス王ノ父市邊  
 押磐ハ雄畧天皇ノ為メニ害セラル其臣日下  
 部使主王ト王ノ弟弘計王トヲ奉シ難ヲ丹波ノ  
 餘社ニ避ク既ニシテ又播磨ノ赤石ニ往キシニ  
 使主縊レテ死ス其子吾田彦隨從シテ去ラズニ  
 皇孫俱ニ姓名ヲ變シテ奴トナリ縮見ノ屯倉首  
 忍海部細目家ニ在リテ牛馬ヲ牧飼ス去歲播磨  
 ノ國司來目部ノ小楯事アリテ郡ニ至ル細目置

酒シテ之ヲ款待ス弘計兄ニ謂テ曰ク吾二人潛  
 匿スルヲ已ニ久シ今當ニ告ルニ情實ヲ以テセ  
 バ或ハ濟拔セラレン王猶其禍ヲ致サンヲ恐  
 レテイマダ許サズ弘計慨然トシテ曰ク吾二人  
 皆皇孫ナリ寧口自ラ告テ害ヲ買フ長ク人ノ  
 奴ト為リ困辱スルヲアタハズ因テ相抱持シテ  
 泣ク夜深酒酣ナル時坐中ノ人互ニ起テ歌舞ス  
 兄弟燭ヲ秉リ立テ侍ス細目曰ク彼レ人ヲ先ニ  
 シテ已ヲ後ニス恭敬退讓君子ノ儀アリト云フ  
 ベシ小楯モ亦自ラ絃ヲ舞シ二人ニ命シテ起テ

舞シム相讓ル一良久シ小楯頻リニ之ヲ促カス  
是ニ於テ弘計衣ヲ整ヘテ起テ歌ヲ作りテ其系  
ヲ述フ小楯之ヲ異トス弘計王乃チ自贊シテ曰  
ク我ハ是レ去來總別天皇ノ子押磐皇子ノ胤ナ  
リト小楯大ニ驚キ席ヲ離レテ再拜シ即チ郡民  
ヲ發シ假リニ營築シテ之ニ處キ其屬ヲシテ給  
事セシメ自ラ驛傳ニ乘シテ京ニ詣リ具サニ其  
狀ヲ奏ス 天皇大ニ喜テ曰ク朕子ナシ以テ嗣  
ト爲ス可シト乃チ迎ヘテ宮中ニ入レ億計王ヲ  
立テ太子トナシ弘計王ヲ皇子ト爲ス○臣連ヲ

遣ハシ諸國ノ風俗ヲ巡察セシム○四年 天皇  
親ラ囚徒ヲ録ス○五年正月十六日 天皇崩ス  
壽四十一同年十一月九日河内國坂門原陵ニ葬  
ル皇太子億計王弟弘計王ニ讓リ肯テ位ニ即カ  
ス弘計王モ亦固辭ス是ニ於テ王ノ姉飯豐皇女  
朝ニ臨ミ制ヲ稱シ年ヲ踰ヘスシテ薨ス葬ルニ  
天子ノ禮ヲ以テス皇子弘計王立ツ是ヲ 顯宗  
天皇トス

顯宗天皇

弘計天皇ト號ス 履仲天皇ノ孫ニシテ市邊押

磐ノ第三子ナリ母ハ美媛ト號ス 允恭天皇ノ  
 三十九年庚寅ニ降誕 清寧天皇崩シテ後乙丑  
 年正月一日即位時ニ年三十六〇飯豐皇女ノ薨  
 スルニ及テ太子億計王諸大臣ト臣ニ璽綬ヲ持  
 シ天下ヲ 天皇ニ讓リテ曰ク迎立ヲ蒙ル者ハ  
 咸ナ弟ノ明斷ニ出ルナリト固ク讓リテ止マズ  
 天皇止ムコヲ得スシテ之ヲ聽キ遂ニ即位ス億  
 計王ヲ以テ儲君トスルコト猶前ノ如シ〇元年詔  
 シテ曰先王 天皇ノ父市邊押磐ナリ 命ヲ荒野ニ殞ス朕亡逃  
 遺骸ヲ求ムルニ由ナシ夫レ天下ヲ周訪シテ以

テ告報セヨト一老嫗有リ其處ヲ知ルト言フ  
 天皇即チ嫗ヲ將テ近江ノ蚊屋野ニ幸シ墳塋ヲ  
 得テ改葬ス〇二年三月始テ曲水ノ宴ヲ設ク〇  
 紀大磐任那ニ據リ謀ヲ高麗ニ通シ三韓ヲ并吞  
 セント欲ス乃チ府ヲ開キテ自ラ神聖ト稱キ百  
 濟ノ人ヲ殺シ山城ヲ築キ百濟ノ糧道ヲ絶ツ百  
 濟王怒リテ之ヲ攻ム大磐迎ヘ撃テ之ヲ破ル既  
 ニシテ兵竭キ力屈シテ本邦ニ走リ歸ル〇三年  
 四月廿五日 天皇崩ス壽三十八大和國傍立磐  
 杯立陵ニ葬ル皇太子立ツ是ヲ 仁賢天皇トス

○顯宗天皇ノ世年大ニ稔ス粟一斛ニ直ヒ銀錢一文ト謂フ

仁賢天皇

億計天皇ト號ス 顯宗天皇ノ同母兄ナリ 允恭天皇ノ三十八年己丑ニ降誕シ 清寧天皇ノ三年四月七日立テ太子トナル年三十四戊辰年正月五日即位時ニ年四十〇元年小泊瀨稚鷯尊ヲ立テ太子トス〇初ノ 顯宗天皇 雄畧天皇ノ其父顯宗天皇ノ父市邊押磐ノ皇子ナリヲ殺スヲ怨テ其陵ヲ壞ラント欲ス 天皇諫テ曰ク我父ハ皇子タリ

トイヘ凡人臣ナリ禮固ヨリ君上ヲ讎トセス且ツ我兄弟富貴ヲ得ルヲハ 清寧ノ殊恩ニ因テナリ 雄畧ハ即チ 清寧ノ父ナリ今陵ヲ毀チ怨ヲ報セハ 倒行逆施ニアラズヤト 顯宗天皇大ニ悟ル〇天皇嘗テ 顯宗天皇ト宴シ瓜ヲ取テ喫セントスル時偶刀ナシ 顯宗天皇手カラ刀ヲ執リ皇后ニ命シテ傳進セシム皇后乃チ天皇ノ前ニ至リ立ナカラ刀ヲ盤ニ置ク 天皇即位ノ後皇后大ニ失敬ヲ恐レ明年遂ニ自殺ス 〇十一年八月八日 天皇崩ス壽五十同年十月

五日河内國埴生坂本陵ニ葬ル太子立ツ是ヲ  
武烈天皇トス

武烈天皇

小泊瀨稚鷦鷯天皇ト號ス 仁賢天皇ノ太子ナ  
リ母ハ春日大娘ト號ス 允恭天皇三十九年ニ  
降誕 仁賢天皇ノ七年正月三日立テ太子トナ  
ル年四十五同十一年十一月十一日即位時ニ年  
四十九〇元年大伴金村ヲ以テ大連トス大臣眞  
鳥久シク國政ヲ執リ潜ニ篡奪ヲ謀ル其子鮪又  
天皇ニ無禮ナリ是ニ於テ大伴金村ニ命シ眞鳥

及ヒ鮪ヲ殺サシム〇八年十二月八日 天皇崩  
ス壽五十七 繼體天皇二年十月三日傍丘磐杯  
北陵ニ葬ル 天皇刑名ヲ好ミ法令分明ナリ然  
レモ性殘忍ニシテ殺ヲ好ミ孕婦ヲ割テ其胎ヲ  
觀或ハ人ノ指甲ヲ解キ薯蕷ヲ掘ラシメ人ノ頭  
髮ヲ抜キ之ヲシテ樹ニ登ラシメ下ヨリ射墜シ  
テ以テ快トス其殘虐此ノ如シ 天皇嗣ナシ  
應神天皇ノ玄孫ヲ迎ヘテ立ツ是ヲ 繼體天皇  
トス

繼體天皇

男大迹<sup>ホト</sup>天皇ト號ス 應神天皇五世ノ孫ナリ母  
 ハ振媛<sup>スミ</sup>ト號ス 允恭天皇ノ三十九年庚寅ニ降  
 誕丁亥年二月四日即位時ニ年五十八○天皇ノ  
 父彦主人<sup>ヒコノミナト</sup>王高島ノ別業ニ在リテ 天皇ヲ生ム  
 幼ニシテ孤トナリ母ニ從テ越前國高向邑ニ在  
 リ長スルニ及テ大度アリ士ヲ愛シ賢ヲ禮ス  
 武烈天皇崩シテ嗣ナシ大連大伴金村議シテ  
 天皇ヲ迎フ金村跪テ三種神寶ヲ上リテ勸進シ  
 遂ニ即位ス○三年使ヲ百濟ニ遣シ其民ノ逃亡  
 シテ任那ノ日本縣ノ邑ニ在ル者ヲシテ送リテ

國ニ歸サシム○五年都ヲ山城國筒城<sup>ツツキ</sup>ニ徙ス○  
 七年百濟五經ノ博士段楊爾ヲ貢ス○八年皇太  
 子ノ妃悲泣シテ曰ク妻子ナシ亦名モ後世ニ傳  
 フルヲナラシメ太子感嘆シテ之ヲ 天皇ニ奏  
 ス乃チ詔シテ曰ク宜シク匝布屯倉<sup>ナハツツ</sup>ヲ賜ヒ以テ  
 妃ノ名ヲ萬世ニ傳フベシト妃名ハ春日ト號ス  
 ○二十年都ヲ磐余ニ徙シ玉穗宮<sup>タマホ</sup>ト號ス○二十  
 一年近江毛野ヲシテ衆六萬ヲ率キ任那ニ往キ  
 新羅ノ侵ス所ノ故地ヲ復ス筑紫國造磐井叛シ  
 テ火豐<sup>ヒ</sup>豐<sup>ヒ</sup>肥前肥後ノ地ニ據リ新羅ト謀ヲ通

シ毛野ヲ拒ク是ニ於テ大連物部麤鹿火ヲ以テ  
 大將軍トナシ之ヲ討シム 天皇親ヲ斧鉞ヲ授  
 ク明年麤鹿火磐井ヲ擊テ之ヲ斬ル○二十五年  
 二月七日 天皇崩ス壽八十二同十二月五日攝  
 津國藍野陵ニ葬ル皇太子立ツ是ヲ 安閑天皇  
 トス

安閑天皇

勾フナリノオヒト大兄廣國ヒロクニ押武オシタケ金日カナヒヒ天皇ト號ス 繼體天皇ノ  
 庶長子ナリ母ハ目子メコ媛ト號ス 雄略天皇ノ十  
 年丙午ニ降誕シ 繼體天皇ノ七年十二月八日立

テ太子トナル年四十八同二十五年二月七日即  
 位時ニ年六十九○元年都ヲ大和國ニ徙シフナリ勾カナ金  
 宮ト號ス○大ニ年有リ○二年大ニフナリ酺ス詔シテ  
 曰ク連年登穀黎庶耕稼ヲ樂シミ鰥寡飢寒ヲ免  
 ル朕甚タ喜フ大酺ヲ賜フ一五日天下ノ驩ヲ爲  
 セ○十二月十七日 天皇崩ス壽七十同月河内  
 國高屋タカヤ丘陵カガニ葬ル皇弟立ツ是ヲ 宣化天皇ト  
 ス

宣化天皇

武小廣國タケノヒロクニ押盾オシタテ天皇ト號ス 繼體天皇ノ第二子

ナリ母ハ目子媛ト號ス 雄略天皇ノ十一年丁未ニ降誕シ 安閑天皇ノ二年十二月即位時ニ年六十九〇元年都ヲ檜隈廬入野ニ徙ス〇大伴金村物部麤鹿火竝ニ大連タルノ故ノ如シ〇二年新羅任那ヲ侵ス大連ノ子大伴磐及ヒ狹手彦ヲシテ之ヲ援ハシム磐ハ筑紫ニ留テ三韓ニ備ヘ狹手彦ハ往テ任那ヲ鎮シ又百濟ヲ救フ〇四年二月十日 天皇崩ス壽七十三同十一月十七日大和國身狹桃花鳥坂上陵ニ葬ル皇弟立ツ是ヲ 欽明天皇トス

相傳フ狹手彦妻佐用媛別ヲ悵ニ殊ニ甚シ松浦山ニ登リ

テ以テ望ミ領中ヲ持シテ之ヲ招ク船漸ク遠ク海沖淼茫タリ號泣シテ自ラ禁スルヲアタハズク心ヲ推テ悲吟ス聽者感傷セザルナシ或ハ云フ立ナガラ化シテ石トナルト

欽明天皇

天國排開廣庭天皇ト號ス 繼體天皇ノ嫡子ナリ母ハ手白香ト號ス 繼體天皇ノ三年己丑ニ降誕シ 宣化天皇ノ四年十二月五日即位時ニ年三十一〇元年都ヲ磯城島ニ徙ス金刺宮ト號ス

〇蕃漢歸化ノ人ヲ分チテ諸國ニ編籍ス秦大津父ヲ以テ大藏省ノ事ヲ知セシム 天皇幼時夢ニ神アリ告テ曰ク皇子秦大津父ヲ寵セヨト覺



テ後人ヲシテ覓メシム之ヲ山城國深草里ニ得  
タリ見テ問テ曰ク汝チ嘗テ何ノ好事ヲ作ス對  
テ曰ク有ルヲナシ但臣昔シ商賈ヲナシテ伊勢  
ヨリ還ル時途山中ヲ經偶兩狼ハ鬪フヲ見テ以  
謂ク是必ス獵者ノ爲ニ獲ラレント乃チ排解シ  
テ去ラシム 天皇曰ク必ス其報ナラント輒チ  
以テ近侍トナス 麗參日ニ渥シ此ニ至リテ是ノ  
命有リ○肅慎國ノ人佐渡ノ御名部埼ニ來泊シ  
民人ヲ抄掠シ渴シテ瀨河浦ニ飲ム死スル者甚  
々多シ時人以テ浦神ノ崇トス肅慎ハ即チ韃靼

ナリ○六年膳臣巴提使ヲ百濟ニ遣ス巴提使百  
濟ニ至リ一夕海濱ニ宿シ其小兒ヲ亡フ時ニ大  
雪ナリ起テ尋索スルニ地上ニ虎蹤有ルヲ見ル  
乃チ隨テ行キ巖岫ノ下ニ至ル果シテ虎アリテ  
跳出シ巴提使ヲ見テ口ヲ張リ噬ントス巴提使  
左手ニ虎ノ舌ヲ捉リ右手ニ刀ヲ拔テ之ヲ刺殺  
シ其皮ヲ取テ還ル○十三年百濟釋迦佛ノ金像  
及ヒ經論幡蓋等ノ物ヲ獻シ表ヲ上リテ其功德  
ヲ述ブ 天皇以テ群臣ニ咨フニ蘇我稻目班ヲ  
越テ對テ曰ク西蕃ノ諸國皆之ヲ尊禮ス我邦豈

獨リ違ハンヤ物部尾輿中臣勝海俱ニ奏シテ曰ク我國素ヨリ國神アリ今蕃神ヲ拜セバ國神ノ怒ヲ致サント 天皇之ヲ然リトシ乃チ佛像ヲ稻目ニ賜フ稻目向原ノ別墅ヲ捨テ、伽藍トナシ向原寺ト曰フ時ニ諸國大疫久フシテ愈甚シ尾輿等奏ス疾疫ノ起ル實ニ佛ヲ禮スルニ因ル宜シク速ニ佛像ヲ毀テテ以テ後福ヲ求ノン 天皇之ニ從ヒ乃チ命シテ佛像ヲ難波堀江ニ投シ悉ク伽藍ヲ焚キ以テ國神ニ謝ス○三十二年四月十五日 天皇崩ス壽六十三同九月大和國

檜隈坂合陵ニ葬ル太子立ツ是ヲ 敏達天皇トス

敏達天皇

淳中倉太珠敷天皇ト號ス 欽明天皇ノ第二子ナリ母ハ石姫ト號ス 宣化天皇ノ三年戊午ニ降誕 欽明天皇ノ十五年正月七日立テ太子トナル年十七壬辰年四月三日即位時ニ年三十五蘇我馬子ヲ以テ大臣トシ物部守屋ヲ大連トス 馬子ハ稻目ノ子守屋ハ尾輿ノ子ナリ○元年高麗上表ス其表タルヤ墨ヲ以テ烏ノ羽ニ書ス人

辨スルナシ王辰爾ナルモノ其羽ヲ取リ蒸ス  
ニ飯甑ヲ以テシ之ヲ帛ニ印セシニ文字盡ク見  
ヘ始メテ讀ムヲ得タリ○十三年馬子百濟ノ  
佛像ニ船ヲ得テ殿ヲ造リテ之ヲ安ス浮屠ノ教  
是ニ於テ稍弘マル○十四年疫病流行シ民多ク  
死ス時ニ蘇我馬子佛法ヲ崇信シテ佛宇ヲ脩治  
ス物部守屋素トヨリ佛法ヲ喜ハス 天皇ニ奏  
ンニ塔宇ヲ毀テ佛像ヲ燔キ餘燼ヲ難波ノ堀江  
ニ棄テ又馬子ノ崇信スル所ノ三尼ヲ捕テ之ヲ  
捷ツ是ニ由テ馬子ト隙有リ其後馬子病ニ依リ

佛ヲ禱ラント請フ 天皇雅ト文史ヲ好ミテ佛  
法ヲ信セズ馬子ニ謂テ曰ク汝獨リ之ヲ爲ヨ他  
人ヲ惑ス一ナカレ○是年八月十五日 天皇崩  
ス壽四十八 崇峻天皇四年四月河内國磯長陵  
ニ葬ル皇弟立ツ是ヲ 用明天皇トス

用明天皇

橘豐日天皇ト號ス 欽明天皇ノ第四子ナリ母  
ハ堅鹽媛ト號ス 繼體天皇ノ十三年己亥ニ降  
誕シ 敏達天皇ノ十四年九月五日即位時ニ年六  
十七○元年都ヲ磐余ニ徙シ池邊雙槻宮ト號ス

○敏達天皇ノ崩スルヤ穴穂部皇子竊ニ覬覦ヲ  
 懷ク 天皇ノ即位ニ及テ益不平ニ堪ヘス是ニ  
 於テ皇太后ニ烝セントシ將ニ殯宮ニ入ントス  
 ル時三輪逆衛士ヲシテ宮門ヲ鎖サシメテ入レ  
 ス皇子怒テ物部守屋ト凡ニ兵ヲ率テ逆ノ家ヲ  
 圍ミ遂ニ之ヲ殺ス○二年四月 天皇病ム群臣  
 ニ詔シテ曰ク朕佛ヲ禱ント欲ス卿等之ヲ議セ  
 物部守屋中臣勝海奏シテ曰ク佛ハ蕃神ナリ何  
 ソ敬スルニ足ンヤ時ニ蘇我馬子詔旨ヲ賛成シ  
 テ僧ヲ引テ宮ニ入ル是ニ於テ守屋馬子怨隙滋

甚シ守屋馬子カ己ヲ圖ントスルヲ聞キ阿都ニ  
 適テ之ヲ避ケタリ馬子ノ黨迹見赤檮勝海ヲ殺  
 ス○四月九日 天皇崩ス壽六十九同七月磐余  
 池上陵ニ葬ル 天皇ノ崩スルヤ繼嗣イマダ定  
 ラズ時ニ守屋穴穂部皇子ヲ立ント欲セシガ馬  
 子之ヲ弑シ遂ニ兵ヲ構ヘテ守屋ト闘フ馬子佛  
 ヲ好ムノ故ヲ以テ皇子豐聰ト親善ス豐聰ハ即  
 チ 天皇ノ子ナリ母后行テ厩ノ前ヲ經ルトキ  
 乃チ産ス名ツケテ厩子皇子ト云フ生レテ能ク  
 言ヒ既ニ長シテ聰敏ナリ一時二十人ノ訟言ヲ

御  
 史  
 記  
 卷  
 之  
 二  
 二  
 十  
 七

竝へ聽キ失スルナシ故ニ又豐聰氏名ツク佛  
 教ヲ習ヒテ深ク之ヲ好ム是ニ於テ馬子皇子ト  
 相謀テ守屋ヲ攻ム守屋家衆ト拒キ戰ヒシガ遂  
 ニ敗走シ赤檣ノ爲メニ射テ殺サル守屋家資人  
 ニ捕鳥部萬ナル者アリ時ニ難波ニ在リテ守屋  
 難ニ及ブト聞テ單騎ニシテ夜遁レ河内ノ山中  
 ニ匿ル馬子兵ヲ遣テ之ヲ索ム萬走テ深篁ニ入  
 リ繩ヲ以テ竹梢ニ繫ケテ之ヲ揺カス衆其伏兵  
 有ランコトヲ恐レテ敢テ逼ラズ萬乃チ逸シ去ル  
 一人溪口ニ伏シテ之ヲ射テ萬ノ膝ニ中ツ追者

モ亦及フ飛矢雨ノ如シ萬刀ヲ輪シテ大呼シ奮  
 撃シテ三十余人ヲ殺シ竟ニ自刎シテ死ス因テ  
 尸ヲ市ニ肆スニ夜ニ至テ大雨疾雷シ萬カ家ノ  
 白狗竊ニ其首ヲ銜シ古冢ヲ掘テ之ヲ埋メ  
 畢リテ自ラ其側ニ斃ル事天朝ニ聞ヘ命ンテ  
 義狗ヲ瘞メ遂ニ萬ノ墓ヲ封シテ之ト相對セシ  
 ム○前皇后群臣ト策ヲ定メ欽明天皇ノ皇子  
 ヲ迎ヘ立ツ是ヲ崇峻天皇トス

崇峻天皇

泊瀨部、天皇ト號ス 欽明天皇ノ第十二子ナリ

母ハ小姉君ト號ス 繼體天皇ノ十四年庚子ニ  
 降誕シ 用明天皇ノ二年八月二日即位時ニ年  
 六十八〇元年宮ヲ大和國倉梯ニ作ル〇百濟王  
 使ヲシテ佛舍利及ヒ僧數人寺ヲ造ル匠鑪盤ヲ  
 造ル工瓦ヲ造ル工畫工等ヲ獻ス〇二年近江滿  
 ヲ東山道ニ穴人雁ヲ東海道ニ阿倍牧吹ヲ北陸  
 道ニ遣テ諸國ノ境界ヲ觀察セシム〇四年紀男  
 麻呂巨勢比良夫狹臣大伴嚙葛城烏奈良等ヲ以  
 テ大將軍ニ任シ兵二万ヲ率テ筑紫ニ屯シ人ヲ  
 シテ新羅及ヒ任那ニ往カシメテ其形情ヲ探究

セシメ以テ任那ヲ復建セントス〇五年十一月  
 三日 天皇崩ス壽七十三即日大和國倉梯岡上  
 陵ニ葬ル此時大臣蘇我馬子定策ノ功ヲ負ンテ  
 驕橫威權ヲ專ニス 天皇常ニ之ヲ惡ミ將ニ刑  
 戮ヲ加ヘントス厩戸皇子馬子トヒニ佛ヲ好信  
 シ親交素ヨリ厚キヲ以テ毎ニ 天皇ヲ諫メテ  
 之ヲ止ム會山猪ヲ獻スル者アリ 天皇之ヲ指  
 テ曰ク何レノ時カ朕ガ惡ム所ノ頭ヲ斷ンテ此  
 ノ猪ノ如クセント宮女ノ中麗衰ヘテ怨懟スル  
 者アリ竊ニ以テ馬子ニ告グ馬子大ニ懼レ乃チ

御國史 卷之二

東漢直駒ナル者ヲシテ 天皇ヲ内寢ニ弑セシム馬子因テ駒ヲ賞スルヲ甚タ厚ク遂ニ之ヲ親睨ス駒功ヲ恃ンテ慎マズ馬子ノ女ヲ姦媾ス馬子大ニ怒リ駒ヲ捕ヘテ樹上ニ縛シ身ヲ射テ之ヲ殺ス○群臣 敏達天皇ノ皇后ヲ推奉シテ大位ニ即カシム是ヲ 推古天皇トス

**推古天皇**

豐御食炊屋姫天皇ト號ス 欽明天皇ノ中女ニシテ 用明天皇ノ同母妹ナリ 欽明天皇ノ十五年甲戌ニ降誕シ 崇峻天皇ノ五年十二月八

日即位時ニ年三十九皇女ノ登極此ニ始ル○元年厩戸皇子ヲ立テ皇太子トナシ政ヲ攝セシム攝政ノ號蓋シ此ニ始ル蘇我馬子太子ト善キヲ以テ大臣タルヲ故ノ如シ共ニ國政ヲ執ル○四天王寺ヲ難波ノ荒陵ニ創ル 天皇大ニ佛法ヲ信ジ太子及ヒ馬子ニ詔シテ佛法ヲ興隆ス是ニ於テ群臣競テ佛寺ヲ造ル○二年大將軍紀男麻呂等筑紫ヨリ至ル○六年新羅孔雀ヲ獻ス○七年百濟駱駝驢羊白雉ヲ獻ス○九年大和國耳梨ノ行宮ニ居ス○百濟ノ僧曆天文地理遁甲方術

ノ書ヲ獻ス○十一年始テ冠位ヲ定ム大德小德  
 大仁小仁大禮小禮大信小信大義小義大智小智  
 凡十二階明年諸臣ニ頒ケ賜フ○十二年甲子春  
 正月戊戌朔始テ曆日ヲ用ユ○太子憲法十七條  
 ヲ定メ改テ朝禮ヲ制ス○十三年大ニ佛像ヲ造  
 ル高麗王之ヲ聞テ黄金三百兩ヲ獻ス○十五年  
 大禮小野妹子ヲ隋ニ遣シ隋主ニ書ヲ遺ル其略  
 ニ曰ク日ノ出ル處ノ天子書ヲ日ノ没スル處ノ  
 天子ニ致スト隋人妹子ヲ稱シテ蘇因高ト曰フ  
 ○十六年妹子隋ヨリ還ル隋使裴世清來テ報聘

ス 天皇之ヲ朝ニ嚮ス世清隋ニ歸ルニ及テ復  
 タ妹子ヲ以テ大使トナシ難波雄成ヲ副使トナ  
 シ再ビ隋ニ聘ス學生沙門等數人隨テ往ク○十  
 七年妹子隋ヨリ還ル位大德冠ヲ授ク○二十二  
 年大上御田歛矢田部造ヲ隋ニ遣ス○二十八年  
 皇太子厩戸大臣馬子ト議シ 天皇紀及ヒ臣連  
 伴造國造等ノ本紀ヲ撰ス○二十九年皇太子薨  
 ス謚シテ聖德ト曰フ○三十二年始テ僧正僧都  
 檢校僧尼ヲ置ク○三十四年大臣蘇我馬子死ス  
 子蝦夷ヲ以テ大臣トス○正月桃李華キ三月霜



フリ六月雪フル二月ヨリ七月マデ雨多ク天下  
 大ニ饑ヘ盜賊蜂起ス○三十五年夏蠅有リ聚集  
 スル一十丈可リ聲雷ノ如シ信濃ヨリ上野ニ至  
 テ散ズ○三十六年三月七日 天皇崩ス壽七十  
 五崩スルニ臨テ 敏達天皇ノ皇孫及ヒ故ノ皇  
 太子ノ子ヲ召シ密ニ後事ヲ告グ其詳ナル一入  
 得テ知ル一ナシ遺詔ニ因テ同九月二十四日河  
 内國山田村竹田皇子ノ陵ニ葬ル田村皇子立ツ  
 是ヲ 舒明天皇トス

舒明天皇

息長足日廣額天皇ト號ス 敏達天皇ノ子押坂  
 彦人大兄皇子ノ子ナリ母ハ糠手姫ト號ス 推  
 古天皇ノ元年癸丑ニ降誕シ己丑年正月四日即  
 位時ニ年三十七○推古天皇崩スルニ及テ 天  
 皇ニ遺詔シテ位ヲ嗣シム是ニ於テ大臣蘇我蝦  
 夷大ニ群臣ヲ會シ議シテ後嗣ヲ定ム群臣遺詔  
 ヲ以テ皆 天皇ヲ立ントス唯境部麻理勢佐伯  
 東人等故ノ太子ノ子山背王ヲ立ントス群議久  
 シク決セズ蝦夷遂ニ麻理勢ヲ殺シ策ヲ定テ  
 天皇ヲ立ツ○二年大仁大上御田耜同ク醫慧日

ヲ以テ遣唐使トス○飛鳥岡ニ徙ル岡本宮ト號ス○五年岡本宮災ス遷テ田中宮ニ居ス○九年大星西ニ流ル聲アリ雷ノ如シ○十二年始テ斗升斤兩ヲ定ム○十三年十月九日 天皇崩ス壽四十九同十二月二十一日大和國押坂内陵ニ葬ル皇后即位ス是ヲ 皇極天皇トス

皇極天皇

天豐財重日足姫天皇ト號ス 敏達天皇ノ孫茅渟王ノ子ナリ母ハ吉備女王ト號ス 推古天皇ノ二年甲寅ニ降誕シ壬寅ノ年正月十五日即位

時ニ年四十九○天皇初メ高向王ニ適ク後 舒明天皇ノ皇后トナル○元年百濟國ノ弟喪使來ル當時蘇我蝦夷ノ子入鹿國政ヲ專ニシ威權父ニ過ク○六月ヨリ大旱シ八月ニ至ル大臣蘇我蝦夷百姓ヲ率テ雨ヲ祈リ又僧ヲ召シ經ヲ誦シテ以テ禱ル皆驗ナシ是ニ於テ 天皇齋戒シテ大和國高市郡南淵ノ河上ニ行幸シ跪テ四方ヲ拜シ天ヲ仰テ祈ル黑雲俄ニ起リ風雷尋テ至リ大ニ雨ル一五日郡國ニ遍ク枯稻皆活ク百姓萬歳ヲ呼ビ稱シテ至徳天皇ト曰フ○二年大臣蘇

我蝦夷疾ニ因テ朝セズ祖廟ヲ葛城ノ高宮ニ建  
テ八旬ノ舞ヲ爲シ大役ヲ興シテ豫メ父子ノ壽  
藏ヲ營ミ名テ大陵小陵ト曰フ潜ニ謀テ 天皇  
ヲ廢シ古人皇子ヲ立ントス皇子ハ 舒明天皇  
ノ子蘇我氏ノ出ナリ故ニ之ヲ立ント欲ス時ニ  
山背大兄王素ト威望アリ入鹿深ク之ヲ忌ミ其  
黨巨勢德ヲシテ兵ヲ率テ大兄王ヲ班鳩宮ニ圍  
マシム王ノ家人拒キ戰フ王ノ奴ニ三成ナル者  
有リ善ク射ル外兵多ク死傷ス乃チ火ヲ縱テ宮  
ヲ焚ク王馬骨ヲ内寢ニ置キ妻子家人ヲ携ヘ逃

レ出テ膽駒山中ニ匿ル巨勢德等灰中ニ骨ヲ見  
テ以爲ク王薨スト圍ヲ解テ退ク王山中ニ在ル  
ヲ五日其家人策ヲ上ツテ曰ク密ニ東國ニ赴キ  
兵ヲ起シテ蘇我氏ヲ滅セヨト王從ハズ或人入  
鹿ニ告ルニ王ノ所在ヲ以テス入鹿即チ人ヲ遣  
テ之ヲ索ルニ得ズ既ニシテ王山ヲ出テ還テ班  
鳩寺ニ入ル入鹿又之ヲ圍ム王及ヒ子弟妃妾皆  
縊ル○三年中臣鎌足ヲ以テ神祇伯トス固辭シ  
テ就ズ鎌足ハ天兒屋根命ノ裔ニシテ一ノ名ヲ  
鎌子ト曰フ博ク書傳ニ涉リ智略人ニ絶ス是ニ

及テ疾ト稱シ退テ三島ニ居ル時ニ入鹿專横ニ  
 シテ國家ヲ危フセント欲ス鎌足慨然トシテ匡  
 救ノ志有リ竊ニ宗室諸王ノ中輔ケテ以テ功ヲ  
 濟スベキ者ヲ察シ心ヲ中大兄皇子ニ屬ス然レ  
 凡情ヲ通スルコトヲ得ズ一日鎌足法興寺ニ至ル  
 皇子モ亦寺ニ遊ビ鞠ヲ槻樹ノ下ニ蹴ル偶々皇  
 子ノ靴脱シテ鞠ト凡ニ轉展シテ鎌足ノ前ニ至  
 ル鎌足跪テ之ヲ奉ル皇子モ亦跪テ之ヲ受ク是  
 ニ由テ情好日ニ密ナリ人ノ嫌疑ヲ生ゼンコトヲ  
 恐レ儒道ヲ南淵先生ニ學ブニ託シ毎ニ相往來

シテ密ニ謀ル鎌足乃チ皇子ニ勸メテ蘇我石川  
 麻呂ト婚ヲ結ビ以テ援トナシ又佐伯子麻呂葛  
 城綱田ヲ薦ム○蘇我入鹿邸宅ヲ甘檮岡ニ雙ビ  
 起シ父蝦夷ノ宅ヲ稱シテ宮門ト曰ヒ已レガ宅  
 ヲ谷宮門ト曰ヒ其子ヲ稱シテ王子ト曰フ柵門  
 ヲ宅外ニ構ヘ傍ニ兵庫ヲ造リ常ニ兵士ヲシテ  
 警衛セシム○四年三韓入貢ス中大兄皇子石川  
 麻呂ニ調テ曰ク三韓進調ノ日卿當ニ表ヲ讀ム  
 ベシ吾レ入テ入鹿ヲ誅ゼントス石川麻呂諾ス  
 期ニ及テ 天皇大極殿ニ御ス入鹿入テ侍ス入

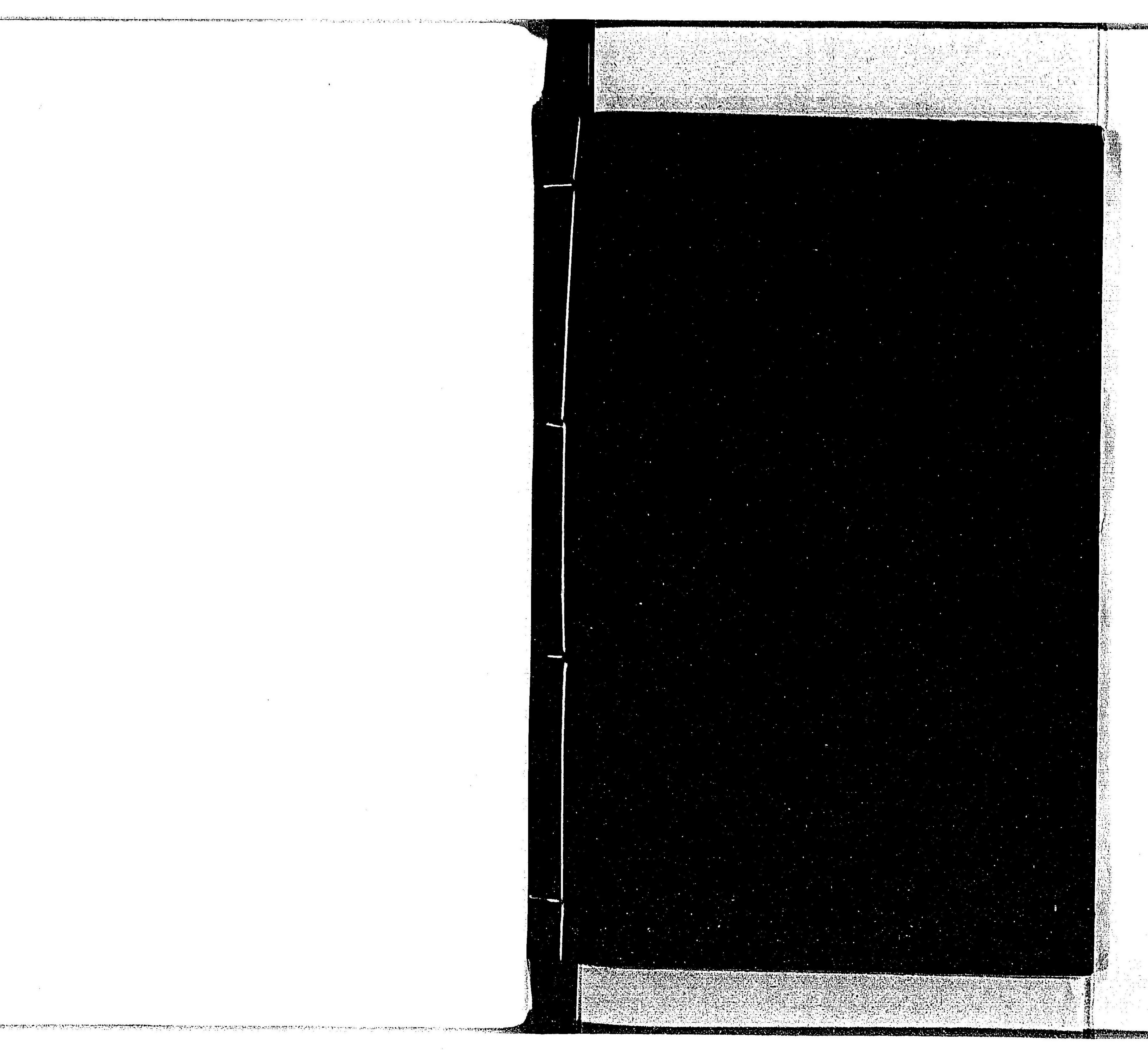
鹿人ト爲リ疑多ク常ニ劍身ヲ去ラズ鎌足俳優  
 ヲシテ之ヲ調セシム入鹿乃チ劍ヲ解テ入ル是  
 ニ於テ諸門ヲ閉ズ皇子親ラ長槍ヲ執テ殿側ニ  
 立ツ鎌足弓矢ヲ持テ警衛ス石川麻呂表文ヲ讀  
 ミ將ニ盡シトスルニ及ビ鎌足子麻呂ヲ促ス子  
 麻呂畏縮シテ發セズ石川麻呂手顫キ聲變ル汗  
 流レテ背ニ沾ク入鹿怪ンデ之ヲ問フ石川麻呂  
 對テ曰ク天威咫尺覺エズ乃チ爾リ皇子其機  
 ヲ失ハンコヲ恐レ徑ニ入テ入鹿ヲ斫ル子麻呂  
 等繼テ進ム入鹿斫ラレテ轉到シ御坐ニ向テ奏

シテ曰ク臣何ノ罪ヲ知ラズ願クハ陛下哀ヲ垂  
 レヨ皇子モ亦奏シテ曰ク鞍クラツリ作入鹿ト云朝權ヲ  
 擅ニシ潜ニ不軌ヲ圖ル故ニ臣等謹テ社稷ノ爲  
 ニ之ヲ誅ス天皇起テ内殿ニ入ル是ニ於テ遂  
 ニ入鹿ヲ誅戮ス皇子又兵ヲ遣テ蝦夷ヲ誅ス事  
 平グ天皇位ヲ輕カ皇子ニ傳フ是ヲ孝德天皇  
 トス

御國史卷二終

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

行  
月  
日  
卷  
第  
三  
十  
三



特31

862

五

本